

真夏の太陽が降り注ぐ岡

山、総社市内のグラウンド。

「震災後は部活動もで

日焼けした少年たちが声を
掛付け合い、夢中でサッカー
ボールを追い掛けた。

東日本大震災で被災した

岩手県の釜石中と大槌中、

宮城県の志津川中サッカー

部員計46人が、6日までの

5日間を岡山県内で過ごし

た。元気を出してもらおう

と、岡山市の国際医療ボラ

ンティア・AMD Aがホー

ムステイやサッカー交流な

どを企画して招いた。

「震災後は部活動もで

きななかった。芝生の上で
サッカーをしたのは久し
ぶり。友達もでき、岡山

あかり

での生活は一生忘れな

い」と志津川中2年菅原

大雅君(14)。津波で自宅

が流され避難所で暮らし

ていた大槌中3年木村恭

友情でサッカーと生徒と被災者

維君(15)は「生活は大変。

でも多くの人に支えら

れ、岡山の中学生の優し
さも感じた」と笑顔を見
せた。

貴重な経験をしたの

は、岡山の中学生も同じ。

「どう声を掛ければい

か不安だったけど、同じ

中学生。すぐに打ち解け

たし、サッカーも楽しか

った。学校で募金も続け

たい」と岡山市立吉備中

震災からまもなく5カ

月。徐々に復興が進むが、

道のりはなお険しい。大槌
中は津波で校舎が使えず、
当面は高校に間借りしての

授業になるという。

「子どもたちは、この先

もさまざまな壁にぶつかる

だろう。そんな時、岡山中

で培った友情や心温まる経験

が苦難に打ち勝つ力になる

はず」。引率した同中の小

野永喜校長(56)は、そう信

じている。(内田光祐)